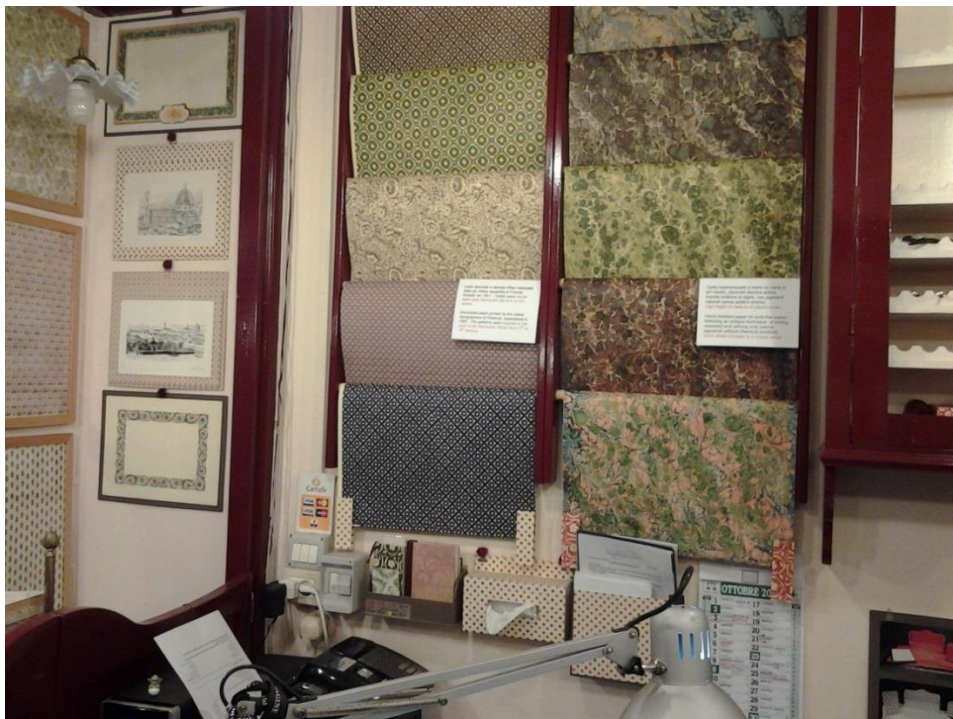
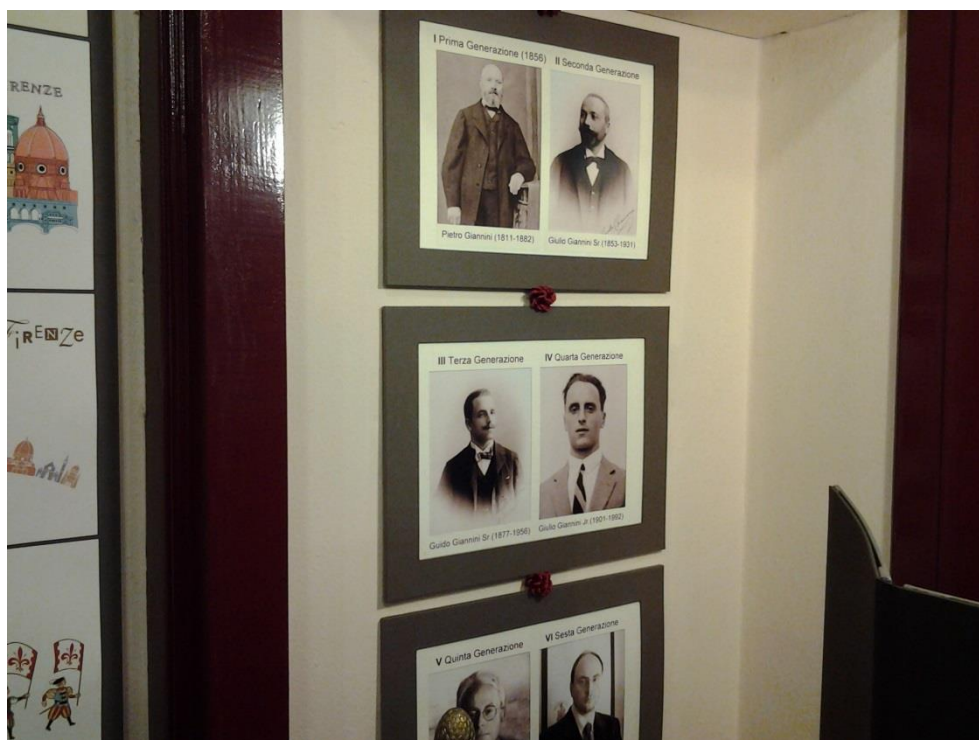




桑田宝子さんは製本家のジャンニーニさん（Lapo Giannini）と共同でフィレンツェで小さな工房を持つ製本修復家である。2012年、早稲田大学の雪嶋先生の講座仲間で一度お尋ねしたことがあり、今回の訪問は2度目である。前は余りゆっくりお話しすることが出来なかったので、今回少し時間をとって、彼女や、パートナーであるジャンニーニさんの仕事ぶりを見せていただいた。彼女の事は少し前になるが、日本のいくつかのテレビ番組でも紹介され、ご覧になった方もあるであろう。工房は小さなお店も兼ねていて、手作りのマーブルペーパーやノートなどがお洒落にならべられており、センスの良さは、さすがフィレンツェ、と感心させられる。



ジャンニーニさんは19世紀から代々続く、フィレンツェ最古の製本業の家系で六代目にあたるところである。入口左手には歴代の写真が貼られており、歴史の重みを感じさせる。



彼ははともにお寡黙な方で、桑田さんと私が、日本の修復事情やイタリアの修復事情などについてうるさいくらいおしゃべりしている間も、黙々と仕事をされていた。まるでそばに誰もいないかのよう。

彼は私と同じアスコナ（スイスの製本修復学校）の出身で、その意味でも私は親近感を感じてはいたが、残念なことにイタリア語がおぼつかない私には、直接コミュニケーションを取る術がなかった。



お二人の最近の仕事は、製本や修復に加え、革とマーブルを使った美しい「インテリア・オブジェ」の制作、「美術品修復」も手掛けておりそのいくつかを見せていただいた。革はトスカーナ産の仔牛、マーブルペーパーはもちろん一点ものである。又それに加え、イタリアの伝統工芸である真鍮細工や木象嵌細工を組み合わせ、豪華な宝石箱も製作している。



私はサンプルとして、美しい本型の箱を購入した。隅々まで職人の手技が光っており、上質な素材と熟練の技が調和した見事な箱であった。



桑田さんは米国の高校を卒業後、大学時代を日本で過ごし、その後渡仏、パリ大学で美術史を学ばれたそうである。その後フィレンツェ美術修復学院で学ぶ傍ら、修復工房で見習いとして実践経験を積み、又、フィレンツェ国立図書館修復部門での研修後、2010年に独立、ジャンニーニさんと共に現在の工房を創業されたとのこと。

美術の道から製本の分野に入る方は比較的多いが、ともすればデザイン重視になりがちな傾向があるように思える。桑田さんの修復作品を見せていただくと、彼女のその美術的センスはバランスよく修復の仕事に活かされていることがよくわかる。様々な経験と知識は彼女の中で理想的に調和している。そのことがとりもなおさず彼女の能力の高さなのだろう。

手仕事をする人は 大抵自分の使う道具に凝るものだが、桑田さんの場合は、その程度は尋常ではない。彼女は日曜ごとに蚤の市に出かけ、軍医さんが使っていたという、メスやスパテラ（金属のヘラ）を購入するのが目下の楽しみとのこと。彼女が見せてくれた珍しい道具類はそれでもまだ持っているものの一部だそうある。



この先また、フィレンツェに来る日があるかどうかかわからないが、書物修復や書誌学の情報を交換しなら末永くお付き合いさせて頂きたいと願っている。名残を惜しみながらお二人とお別れした。

NPO 法人書物研究会 代表理事 板倉正子

☆ 桑田さんとジャンニーニさんの作品はインスタグラムで見ることができます。

☆ https://www.instagram.com/ateliergk_firenze/